

一つの反省

堀田 要治

(一)

今年もまた卒業期が来て、多くの児童生徒たちが学校教育の国語教室から社会教育の国語教室へというようなものがあるとして、手へと移って行く。学校教育の国語教室に属している私達としては、ここにその一人一人について小学校一年からの総決算をせまられるわけである。ところで決算をしなければならぬ項目はたいへん多い。なにしろ戦前にくらべて戦後の国語教育でとりあげようとする範囲は極めて広くなってきた。

このことは国語教育が当然進むべき方向へ進んできたものと、私も亦、信じているのであるが、あの学習指導要領に列挙されているその多方面にわたる一般的目标の一つ一つについて——たとえ全部をやる必要はないと明記されてはいても——卒業予定の生徒の一人一人を検査して行ったとして、どれだけ責任がもてる結果が出るかと考えるとちょっと恐ろしくなる。標準学力が確立されていないのが幸なことになりかねない。これは冗談だが、私たちのつゞけて来た教育の成果が彼等生徒の中にどのように結実しているかは真けんに明めなければならない。ところで手もと

にある評価としては要録に記された数字と目だった数目標についての記事とだけである。それを補うつもりで行った目標別の生徒自己評価表と、こちらからの質問に答えてくれた生徒自身の国語学習の効果の反省記述は、同時に教師の反省材料となるものを多く含んでいた。

先ず、諸学科の中にあつて国語科の学習は特に何を与えてくれたかという質問を用意した。一時、コア・カリキュラムが唱えられた時も、高校の国語教室にはほとんど影響をあたえなかった。生活作文というものに代つた今日も同じである。だからといって、他教科を考えに入れぬ独自の質問ですましていてよいわけでもないだろう。何しろ質問されている生徒の方は、時間ごとに入れ代るいろいろな教科によって形成されているのだから。さて、国語教室でなければ絶対に得られなかったものとしては国文法の知識と詩歌鑑賞の方法とを多数の生徒があげている。このごろ排撃されている知識としての国文法が先ずあがってくるのも皮肉であるが、知識は他のものに比して最も手答えのあるものとして意識にのぼってくる点を考えに入れなければならない。次は漢字やむずかしい語句を習つたこと。語句も諸学科に特有の語

句はその学科の中で最もよく理解されるわけであるから、こゝにあがったのは一般的なことばのことであろう。能力の反省としては、以前に難解だった文章が読めるようになった。拾い読みができるようになったなどと、基礎的な読解力をあたえられたという感想が多い。

その次になると国語科独自という点がうすれて来て、まず社会科との間に混同がおこりはじめた。文学史の知識は社会科でも与えられるという。しかし何人かの生徒が指摘しているように、同じ古典の世界を知るにしても、社会科では概念的であって個人と作品とは挿話として語られるに反して国語科では個人の書いたものを通じてその昔の人・作者の生き方考え方を知り、なおその背後の時代の考え方を知るといふ点で、やはり国語教室独特のものを感じているようである。国語科が、従になるような言い方だが「歴史的感覺を一層はつきりさせてくれた。」と書いている生徒もある。「文体の歴史」の知識を得たというのがあったが、文学史と混同されているがこれは全く国語教室のものといえよう。

更に共通的なものとなってくると、「物の見方考え方を得た」というのがある。しかし、追っかけてこちらから第二の質問、「びっくりするような新しい見方考え方をどの学科で最も多く与えられるか」の答には「社会科で」、「自然科学の諸学科で」というのが多くて、残念ながら——私達の自負に反して国語科の名をあげたのは少数であった。なお、こゝでも国語科独自の点としては、あらゆる人々の種々な叫び、悩み、喜び、怒り、から発した具体的なものを読むことができ、——国語教室でそうした機会を得、

生き／＼とした見方考え方を得たとのべている。能力としては「表現について深いところまで読もうとする態度を養ってもらった」と言っている。しかしその反面には、「いろ／＼な人の物の考え方や生き方がいろ／＼あってどうも頭が混乱する」とか「理解ほくなくなった方がいいが、すぐ定義をたて、一人で満足しているようになった。」といった訴えもある。社会科や自然科学科のように統一する思想を国語科はもっていない欠点でもあろうか。「考える力」とか「考え言葉」などが国語科の第五番目の面として叫ばれているけれども、自惚れているわけにはいくまいと感じられる。

読解力、理解鑑賞（附思考力）に相当する以上の感想の次は、急に濃霧でもかゝったように「国語教室は何を与えてくれたか判らない」といった答に入る。「生活のどこかで役立っているように思う。」「他の教科よりも多く我が生活に役立っていること確かであるが、表面に出てこない。」という風のもの。ことばは動いてはたらくものだから、意識の上で静かに顧みるといった状態では、捕えられないのであろう。やっと「今、このような文章が書けるのは国語の学習のおかげだ」と書きながらそこに気のついたものぐらゐである。但、表現の面について効果があったという答がない原因を、全く上述の「表現のもつ性格」にしてしまうことはできない。即ち、別に用意した第三の質問、「国語のいろ／＼な能力について、学校で伸びたと思うか、学校外で伸びたと思うか。」への答で見ると、発音・アクセント・内容に応じた読み、語り、話しの変え方。などは、ラジオや発声映画によると記したものが非常に多い。そのような面では彼等は殆んど教室には期待

を持っていない。彼等が通って来た国語教室の——最終は私の——指導の貧しさを示している。先程、「物の見方考え方」については国語科は社会科学自然科学科に遙かに及ばないと記したが、生徒たちは、それら諸学科をひっくり回した学校全部でよりも、学校外の読書（単行本、雑誌）友人先輩との談話の方で伸びていると記している。伸びていると思ひ込んでいた方が正しいのかも知れない。私の経験からみても同じ小説でも教室で扱われたとなると急に色あせたものに思われ、ひそかに自分が読んだ時にほんとは感動させられ、その記憶がいつまでも消えないことが思ひ出されるが、彼等によると討論までが同じものだという。教室での討論よりも友人との教室外での討論の方がずっと感動的だという。生活学習と称して、教室の中へ日常的なものを取り入れても彼等がそれに喰いついてこないのは悲しいことである。学校で伸びたとしてあげているのは、第一の質問の答で最初の方にあげたものと一致し、結局基礎的なものは学校で伸びたと思うというわけである。負け惜しみのような言い方だが、学校外で伸びたといひながらも国語学習の範囲のなかに話しことばを生徒たちが含めている点、国語の内容をそのように思わせたのは教師の——いや、国語教科書の——学習指導要領書の吹き込んだ結果である。

最後に、国語教育の究極の目標である言語生活の理想を高めていった点については、彼等は全くふれていない。これこそ彼等にしても記事にむずかしいものであろうし、教師側の評価としても最も困難なものである。習慣・態度・理想の評価の一つとして最近試みたものを次にお目にかけてよう。

(二)

去年の冬は十二月中旬になっても一向に寒くならず、新聞紙上に「暖冬異変」という語が見えはじめた。寒かるべき冬が寒くないことはただに気象の上の問題でなく、社会生活の上にも大きな影響をあたえるので、これを新聞がとりあげるのは当然であるが、問題はその用語である。この語は今年新しく造られたことばではなく、数年前にもずい分、紙面をにぎわしたものだ。だから新聞人の語彙の中には立派に登録されていたのだらう、今年もまた出て来たわけである。見出しの大きな活字となつて出されることは少かったが、記事の中にはあちこちに現われた。そのうちにラジオオまで、このダントウイヘンなることばを電波にのせはじめた。これでいよいよ問題ははっきりして来た。聞いていながらラジオ、ニュース解説者はだれに向つて話しかけているのだらうかと思つた。ダントウイヘンなどという未熟な漢語は、きまり文句としてもまことに通りの悪いものなのである。とここまでが私の持論なのであつて、新聞やラジオにこの語が出てくる度に私がかんをたてるものだから、家人にまでこの語は私には禁句だといひことが知れ渡つてしまった。しかし生徒たちは気づいていないし、この語を材料にして話もしていなかった。私と同じような考をもつ生徒が果して何人いるかどうか調査してみようと思ひついた。これより以前に、このダントウイヘンという語こそ例示しなかつたが、漢字の使用について、同じ意味の語でいくつかの表現形のあるときには、その中でわざ／＼漢語の表現を撰ぶ必要はない、

ということは時々触れたことだし、言語（談話）生活の倫理性と論理性に関する本誌創刊号の西尾実氏の論文も教科書にあることだし、卒業前の生徒たちという条件を加えれば、この調査は、評仙と見なすことができる、と考えた、但無記名で行ったから個人の評仙には役立たない。

問題を作るについては誘導におち入ることをできるだけ避けようと考えた。何しろ相手の生徒というものは、出題者即教師の意図をおしはかることに極めて敏感なように仕込まれている。それで問題を

A 「暖冬異変」とだけ印刷したもの。

B 「暖冬異変とは」と「とは」を増したもの。

C 「暖冬異変という語について」

D 「暖冬異変という流行語について」

E 「暖冬異変という語は誰が流行させたか」

F 「新聞が暖冬異変という語を使うとだれもが暖冬異変暖冬異変と口にするについて」

の六にして別々の紙に印刷し、一つの学級に対してほぼ同じ数ずつを任意に配布して「印刷されていることばや文について心に浮かんだことを書きなさい」というだけで余計な質問は一切受けないこととして、半数の学級は同僚の国語の教師に依頼し、他の半数は、地学の担任教師を除いた他の教科の先生方に依頼した。

A の「暖冬異変」だけという形式は、国語のテストでは読み方や辞書の意味を問うという慣例みたいなものがあるから、そのよ

うな解答をする者が多からうと予想した。もしもこの単純な刺戟だけから、流行語であることの解説にすゝみさらに批判にまで達する答があったとしたら、よほどふだんからの種のことに関心と意見をもっているものであって最高の点をあたえる用意をした。B は「とは」をつけることで読み方などの答は出なくなり、もっぱら内容についての説明が多くなろうと予想し、C の「という語について」の「語」からあるいは用語の問題をかぎつける者の出ることを期待し、D ははっきりと流行語たる条件を与え、F では批判の一手手まえまでのものを与え、文面から「きまり文句としてよくない」という誘導を与えたのではないかと心配しながら、反応を見ることがしなわけである。

その結果を整理すると次の表のようであった。

2 気象学的解説	1 読み方、意味		○ 不能と誤解		× ぶさけた答		A	B	C	D	E	F	計	
	ロ	イ	ハ	ロ	イ	ロ								イ
		21	4	3		2								3
	27		5		1	1								
	26	1	3		2		1							
	16		3		3	1	1							
10	1		4	2		4	4							
11	1					2								
21	92	5	18	2	8	11	7							

一つの反省

×ふざけた答。これはなるべく自由にかゝるために——点数にこだわることなくの意味で、無記名にしたために生じたものである。このうち(ハ)は職員室のストープへあてこすりを暖冬にひっかけた類である。(ケ)の方は今回のテスト自体についての不情なり疑いなりを記したもので、ふざけたという分類では酷で、側面的解答といったもの。これはこちらからテストの目的を説明できなかつたところから生じたもので、大体どの刺戟語にも同じ位なのだ。Eにだけ多いのは、本格的な寒さが来てしまった今日こんな質問をする時期外れ、まづさを指摘しているもので、Eの問題文はそんな答のきつかけをつくるものをもっていろいろである。○不能の(ハ)は、そのうちABCのは暖冬異変という字がわからなかつたものでありDの3人は流行語という意味がとれなかつたものを含んでいる。(ハ)は長い間のどの箇所がわからなかつたか不明で暖冬異変の字がわからなかつたのかどうか不明。(ハ)はこの調査でみつけた意外な誤解で、それは暖冬という字の意味は正しくわかっているのだが、異変についてこれを暖冬の結果として何らかの異変、たとえば地震とかなが、つゞいておこりそうだ、不気味であるといった風に解いていたものである。これはいやな語感となつて、後の9の答の中にまぎれ込込む点で軽視できない。

	3 社会生活への影響	4 流行語であること	5 新聞用語であること	6 新聞・ラジオ	7 ラジオ用語であること	8 きまり文句としてよい	9 きまり文句としてわるい	10 期待した批判	計
54	18	1					1	1	54
50	13		1	1			1		50
49	11	4		1					49
53	12	(3)	4	3	2	2	2	1	53
52	4	(1)	12	3	2	1	4		52
53	12	(3)	(2)		1	2	8	1	53
311	70	5 (7)	17 (2)	8	5	5	16	3	311

1、と2、とはともに意味といわれるもので厳密には区別できぬ分け方だが1、の例は、名詞とだけ記したりふでりがなだけといったものを中心。さすがにD以下の間に対して1、というものはなかつた。2、は辞書の意味から、測候所の報告・解説程度までの幅があるが、社会・経済・個人の生活への影響に言いおよんでいない点で一致している。EとFとについて(ハ)と(ケ)に分けたのは(ハ)は問題の流行と模倣とが気象によるものだと説明するだけで社会的なものを導入し得なかつたもので問題文の理解にやゝ欠けるところがある。(ケ)の方はたゞ気象の不順だけをくわしく書いたもので読解力のたいへん幼稚なものを示すものである。

3、の社会生活への影響を書いたのは、当時の新聞の三面ヤスポーツ欄そっくり。Eの四人とFの十二人とは、2、の場合と同様に読解力不足であるが2、の(ハ)のような区別は出てこない。

4、の流行語であることをABCの刺戟からだけでこゝまで説き及ぶのは相当高く評価すべきだと思う。これに反してDEFにおいて問題文の中に流行ということが与えてあるので、単に流

行の事実だけを記したこれらのものは除外することにした。読解・理解の上で後退もしていないし、前進もしてない。同じことは5、のFの十二人がたゞ新聞の社会的機構の説明に終始していて批判にまで進まないでいるのについても見られる。

この語が新聞用語であることとラジオ用語であることとで批判に辿りつく上で大きな差があるのであるが——新聞でなら許せる面があるがラジオでは許せないこと——それだのに新聞、ラジオと区別せずに論じているものの数を6、にあげた。

7、はいずれも、新聞からラジオへと進んだことを書いている。批判はしていない。

8、9、10、はともに暖冬異変なる語の批判にまで達した者たちである。きまり文句としてよいと言っている根拠としては、「簡潔だから」、「便利ないい方だから」それから「暖冬異変の事実そのものが好ましいからこの字を見ると快よい」との意味らしいのが入っている。この最後のものは○のハ（誤解）の逆として○へ分類すべきかもしれない。このことは9、のきまり文句としてわるいとの答の中には、ずっと根強く入りこんでいる。即、暖冬異変の異変の誤解からくる、いやな語感、これは呪の予言のことばだから使わない方がよい「一目見てなんとなくよい気持のしない字であるから、使いたくない」というのがある。或は暖冬異変暖冬異変と騒ぎまわる「こんなことをいって喜んでいいる心がしれない」との反感から「わるい」と結論を出しているものもある。それで、あいまいなどころがなく、はっきりと私の期待した批判にまで達した者としては10、の三名だけであった。三名の少数とあつ

ては傾向もなにもわからぬが、A B C D E Fの条件には関連してない——普段からそうした批判の心をもっている者だけが答えにも出てきたものと解される。

「自分をかしくく見てほしいと言う本心のある者が使用するもので」

「ダントウイヘンと耳に聞いた時、はじめはわけがわからなかった。すぐあとで新聞でみつけて字がわかった。つまりぬことだと思つた。」

といったところである。なおこの調査と同時に、ダントウイヘンと仮名を与えて漢字をあてさせる調査用紙を交せた組では、半数弱しか漢字をあてていない。聞きも見もしないというのはごく少く、従つて約半数の者は、聞いてわかり、見たことはあるのだが字が思い出せなかつたわけである。高等学校程度の者たちをこれほどにとまどいさせる語は新聞用語としてはひとりよがりの部に入るだろう。

なお実験的にある一つの学級だけについては、以上の結果を、学習の前の実態調査にすりかえて、この問題を討論の形式で学習にとりあげてみた。こんどのテストの種明しもして、新聞の紙面の制約からこのような新しい漢語を生むにいたる弁護論も補足してやって、さて教師の私が結論を下す前に「討論の結果によって今後自分はこの語を自分の作文の中で使いたいと思うか使いたくないと思うか」という問を出してみたらその答としては約七割が「使うつもりのない」と答えている。この時間だけ切りはなしたらば学習の効果は充分あつたとの評価に安心したことだつたら

うが、ふだんはこのような評価の結果を疑わないのだが、前の調査を見ているだけにすこしも安心した気持にはならなかった。暖冬異変についてはよいが又別のこの種の語に出くわしたら三百人中三名をくりかえすのではなからうかと考えたからである。幸福の手紙のように脅しのことばをもっていないが、きまり文句には人を従がわせる魅力をもっている。幸福の手紙が来たら自分のところで喰いとめる。つまりぬきまり文句が来たら自分のところで喰いとめるように一人一人がなっほしいと私は念願しているのだが。

(結)

というようなわけで学年末はいつも私の教師としての自信を動揺させ、低下させる。力の不足を痛感するそばから、国語の学習指導は、学習指導要領が説くようにあの広い分野の全てにわたって融通無礙であることができるのだらうとの疑いの心の湧くのを覚える。できないのはその原因が全て現場のもつ悪条件——それについては第八輯の「現場の国語教師から」の中で増淵恒吉氏が書いていられる——その悪条件のなせるわざであるのならばそれはそれとしての解決の方向もあるわけだが、それらの制約の他に何か国語教室は本来の限界をもっているのではないか、そしてそれをはつきりさせた方が指導も落着き、徹底もするのではないかと思われるところがある。自信の回復のためにも、このことをはつきりさせることが私の今の課題である。(一九五四、二、一〇)